読書のすすめ



『ことば医者』
高柳克弘 著



『そらのことばが降ってくる』で小学館児童出版文化賞を受賞された俳人の高柳克弘氏の児童小説です。

人間は言葉を持つ生き物ですが、話す言葉が時として相手の心を傷つけてしまったり、自分も相手の言葉で悩むことがあります。

胸の奥に言えないことが溜まって吐き出せずに苦しんでいる子、乱暴な言葉を浴びせられて辛くなる子、仲間から次第に距離を置かれてると感じ始めた子、自分の発した言葉が誤解されて周りに広まり、しゃべるのが怖くなってしまった子。

言葉がきっかけで心が病んでいる子どもたちに、それぞれユニークな処方をしてくれるお医者さんがいたのです。文中には、次のような言葉があります。

「傷つけ合うために言葉が作られたわけじゃない。人と人をつなぐために作られたはずだ」

『無言館のうた』
窪島誠一郎 著

十五年前、長野県上田市の友人を訪れた際に『無言館』を紹介してもらい展示物を拝観しました。第二次世界大戦で出征し、還らぬ人となってしまった二十代、三十代の画学生の遺作を展示した美術館です。静寂な里山に、ひっそり建っていて館内はひんやりした空気が流れていました。

館長でもある窪島氏は三年余りかけて遺族を訪問し、四十八作品、一つひとつに寄り添い、自らの思いを綴っています。著者自身も末期がんで治療を続けながら、執筆活動をされたことにも心打たれました。

『クジラがしんだら』
江口絵里 文
川さきしゅんいち 絵
藤原義弘 監修



クジラが死んだ後、どうなるのだろうか？

と、考えたことがありますか。

腐っていく、流されていく等、おおざっぱな考えがよぎるのではないでしょうか。

この絵本を読むことで、実は、「命の終わりから始まる不思議な命のつながり」が見えてくるのです。

老いたクジラの死体が深海に沈んでいきました。深海は食べ物が少ないので、厳しい世界に住む生き物にとっては、ごちそうの塊です。アンコウ、グソクムシ、ユメザメ、コンゴウアナゴ・・・多くの生き物が続々と集まり、クジラに飛びつき食べ始めました。その後も切り果てのない程、多くの生き物が群がります。半年がたつと、山ほどあった肉は食べ尽くされ骨だけとなりましたが、それで終わりでなく、赤い糸のようなホネクイムシが集まってきます。圧巻の様子です。ホネクイムシが骨の中を食い尽くし、そこに卵を産み落とします。

こうして、一頭のクジラの体は、様々な生き物の命を支えていくのです。

この絵本を通して、海底の生き物に関心を持つ方もいるかと思います。

最後のページに生き物図鑑や質問コーナーがあり、親子で読むのもいいですね。



なれたかに 94

松本 真依さん



◎名前：松本真依さん
◎家族：父・母・妹
◎出身地：兵庫県
◎太地に住んで３年になります。
◎太地に来ての
＊第1印象
至るところにイルカ・クジラがいる！
＊現在の感想をズバリ
・良いところ
自然豊かで、動物がたくさんいるところ
・悪いところ
どこへ出掛けるにも遠いところ
◎あと ひと言 ふた言
まだ住んで３年ですが、既に落ち着ける場所になっています。毎日綺麗な海が見られて幸せです！

鯨波歌壇

こかりもて毎日歩く純粋さ変っておらず夫の眼を見る　正崎　光代

小一の女児（こ）の育てし朝顔の伸びたる蔓は鹿に喰われけり　世古　忠子

ハグすればはずかし小さき声あげて「ジイジ長生きしてね」孫　三原　勝利

大好きな北の地の旅孫と行く今年一番幸せな時　桝田　歌民

風待ちの入り江に繋ぐ舟の数増えて嵐の接近を知る　畑下　雅昭

朝夕のただに寂しきあげる経あの母の声ほがらなりけり　吉田　敬

三代を終えるわが家に吾ひとり今年も庭のバラ咲き競う　東　ひとみ

いさな俳壇

ひとり酒待宵月の暗き部屋　禹　敬

水澄むや病葉（わくらば）吾をのせ流る　三原岬風子（こうふうし）

木の実跳ね世界遺産の池に落つ　上田ヒサミ